放送番組センターレポート

BROADCAST LIBRARY Report

2015.2 No.21

http://www.bpcj.or.jp/

（公財）放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110

TOPICS 今号のトピックス

■公開セミナー　制作者に聞く！　連続テレビ小説「花子とアン」
■カンヌライオンズ＆ACC CMフェスティバル入賞作品上映会
■トムス・エンタテインメント アニメと歩んだ50年展ほか
■サテライト・ライブラリー及び大学での教育利用
■番組保存委員会ならびに事業運営委員会開催

■公開セミナー　制作者に聞く!　連続テレビ小説「花子とアン」

11月29日、公開セミナー「制作者に聞く!」を開催。翻訳者・村岡花子の半生を描き、多くの視聴者に支持されたNHKの連続テレビ小説『花子とアン』を生み出したスタッフが、番組への思い、撮影現場のエピソードなどを、名場面の映像や登場人物の写真、美術資料などを交えながら語った。

[登壇者]　加賀田透（制作）　柳川　強（演出）
有本　弘（美術）
[司　会]　ペリー荻野（コラムニスト）

『花子とアン』誕生までのいきさつについて、加賀田氏は「中園ミホさんと柳川君と3人で最初に顔を合わせたのが一昨年の暮れ位。『何をやろうか』という話を始めた時に中園さんから時代物−現代ではない近過去の時代−をやりたいという希望があった。僕らも明治・大正・昭和という時代に取り組んでみたい思いがあり、原作物やオリジナルなど様々な候補を出し合い2か月位やり取りをした。進めていくうちに、候補の一つであった『花子とアン』の原案である『アンのゆりかご』が中園さんに響くものがあり「これは書ける」という話になったのが、去年の1月か2月位の事だった。」と振り返った。

ヒロイン決定の経緯について、柳川氏が「今回59歳まで演じなければいけないので、新人だと厳しいと思っていた。たまたま『横道世之介』という映画を見た。その中で吉高さんがケラケラ笑うシーンがある。映画を見ていくうちに、彼女が可愛くて愛おしくて、彼女が笑うと客の僕も笑っているし、泣いていると泣けてくる。映画館を出た時に、これだけ見ている人を楽しくしてくれる彼女が今回のヒロインにぴったりだと思った。」と説明すると、加賀田氏が「その映画の中で吉高さんが30代を演じているシーンがあり、若い頃の天真爛漫な感じとはまた違う30代の大人の女性の姿を演じていて印象に残った。この人だったら村岡花子の明治・大正・昭和にわたる長い人生をやって貰えると感じた。」と加えた。

明治のドラマを作るには、ロケ地探しの苦労がある。有本氏は「明治ドラマというともう時代劇で、撮影場所がなかなか無い。今回、修和女学校に相応しい場所が無いか、ずうっと探し、最終的に明治村の北里研究所になった。ポイントとしては、実際の花子さんが通ったモデルになった女学校の<坂道を登るとその向こうに学校が見える>というイメージを大切にした。」と語った。最終的に、修和女学校の外観と門は明治村で撮影したが、玄関階段ホールは群馬大学、そしてそこから先はセットを使用したという。

放送中、甲府の安東家のセットも話題になった。有本氏が「まずは山梨での場所探しから始まった。何も無い所に道を切り開いて家を建てた。外に建てるセットなので、雨風や大雪に耐えられるよう、非常にがっちり建てた。」と説明した。この安東家のセットはスタジオにも建てられた。有本氏は「スタジオも柿の木ほか全く同じシチュエーションで建てている。スタジオに建てるという事も前提で、ロケ場所の全体の大きさなどは計算した。安東家は最終週まで出てくる非常に大事なセットになるので、力を入れて作った。」と語った。甲府のロケ現場では、出演者がセットという事に気付かず「この建物よく見つけたね」、「未だによくあったな」と勘違いされたという。甲府に建てたセットは、今現在は韮崎に移築して一般公開されている。

『花子とアン』の人気は登場人物の魅力が大きい。それぞれの登場人物や撮影現場のエピソードを振り返った。まずは安東家。安東家の顔の黒さの話題に対し、柳川氏が「井原さんと室井さんは<どちらが黒いか合戦>を毎日していた。ある時、室井さんが鼻の真ん中に黒いのを付けると自

分がすごく可愛く見えると思ったらしく、それで井原さんも『室井さん、あなただけやっているのは卑怯だよ』と自分もやりだしたり（笑）などお互いにメークの黒さを競い合っていた。」と撮影現場の楽しい様子を明かした。『花子とアン』はドラマの各所に『赤毛のアン』の様々な人の名前やセリフを散りばめている。石橋蓮司さん扮する周造はアンの育ての親・マシューのイメージなので、周造の口癖「そうさな」という言葉はマシューの口癖であるが、言葉指導の先生には、山梨言葉では「そ」は「ほ」になるので「ほうさな」と直されてしまう。加賀田氏が「周造はマシューです。ご意見は最もだが、そこを曲げて『そうさな』と言わせて下さい。」と頼んだという。

意外に人気者になった武について、加賀田氏は「武のキャスティングは非常に珍しいパターン。普通は、大人の本役に合わせて子役を決めるが、武は例外で、最初に子役が決まっていて、その子役のイメージに合わせて探した。はっきり言って顔だけで選びました。」と会場を笑わせた。

朝市について、柳川氏は「旦那の村岡印刷さんよりも、花子の人生に一番影響を与えている。結婚もラジオのおばさんになるのも結局は彼が肩押しした。女性にはああいう男性が一人いるといいですよね。」と語った。その朝市と花子がよく会っていた図書室。有本氏は「本はレプリカだけでなく、オリジナルもたくさん作り、一冊々々思い入れがある。セットも面白いが、こういう部分も非常にやりがいがある。」と語った。その後、白鳥かをる子、ブラックバーン校長、村岡英二、嘉納伝助など魅力的な登場人物の話が次々飛び出した。最後に、ナレーションの美輪明宏さんについて、柳川氏は「明治、大正、昭和の時空を超えて語れるのはこの人しかいない。また翻訳家の話に必要な文化の香りを醸しだせるのは美輪さんだと思った。」と振り返った。

出演者の衣装について、有本氏は「衣装部のスタッフがこの時代のアンティークを実際に借り集めて衣装を揃えた。それをそのまま再現するように着せるのではなく、この時代はこういうアレンジをしたのではないかと考え、それぞれの登場人物ごとに個性のある合わせ方をしている。」と語ると、柳川氏が「この時代のドラマは、普通、今の衣装を古びさせて着せる。時代劇をやっていて衣装の事をよく知っている役者さんは、今回の衣装には非常に感激していた。」と加えた。その他、醍醐さんのリボンはアンティーク物を海外から取り寄せた事もある、宇田川先生の過激なファッションなども話題となった。有本氏は「当時の衣装は、非常に大胆なもの、派手なものが結構ある。」と語った。

後半はゲストそれぞれが選んだ映像を上映。有本氏の映像は、美術ならではの「VFXメーキング」。思わぬ合成シーンに会場が大いに沸いた。「皆さんに気付かれないようにたくさんの映像合成をしている。時代劇というのは多くの制約がある中で映像合成という技術を使わないと今や成立しない。以前は、溢れる現代物、例えば電柱に雑木を抱かせて木に見せかけたりする隠し物をしていた。今はそういう所に労力を払わず、クリエーティブなポジティブな所にお金や時間を使える時代になった。」と説明した。

加賀田氏は<はなが女学校卒業後、甲府に帰ってくる事を望んでいたふじが上京し、はなの授業風景を眩しく見つめ、本心をはなに告げる事なく去って行くシーン>を選択。「『花子とアン』には様々なテーマが含まれている。その中の一つに地方と東京がある。廊下に佇んだふじの表情を見て、僕自身も地方の出身で、大学を卒業した時点で<故郷に帰らない>選択をした一人。その時、僕の母親も、口では何も言わなかったが、今のふじのような表情をしていたのではと思い、とても切なくなる。全ての親不孝者たちに見て欲しいシーンだと思っている。」と語った。

柳川氏は、第1話の吉平とはなが果樹園を歩くシーン、第95話「愛の賛歌」のシーン、最終話のラストシーンを繋いで見せた。全てのシーンに綿毛（鳥の羽）が降っている。1週目は西洋の綿畑で綿毛が散っているイメージを重ね、『赤毛のアン』の世界と甲府が繋がっている事を伝え、「愛の讃歌」のシーンは蓮子の自由の翼というイメージに繋がった。最終週について柳川氏は「花子が書いた『赤毛のアン』が日本の皆さんの心に触れて現代まで続いているというラストのナレーションで、花子の想像の翼が視聴者の皆さんの想像の翼になるというイメージを表現した。想像の翼が羽ばたける自由な世の中でありたいという思いを込めた。」と語った。

ペリー氏からの『花子とアン』は自分にとって、どんな存在になったかという問いに、加賀田氏は「多くの視聴者に見て頂いた事は本当に嬉しい。これまで生きてきた中で積み上げてきたものを出し切ったと思っている。」、柳川氏は「宝物になった。10年後にこのドラマに携わっていたスタッフですと言われた時に、自分がちゃんとしていないとこのドラマを汚してしまう。育てていかなければいけない宝物だと思う。」、有本氏は「朝ドラという非常にタイトなスケジュールの中で大変な思いをしたが、そんな中でも隙のない脚本がくるので、大変ながらもたくさんのシーンや情景を描け、たくさんのミニチュア（小道具）も作れ、物を作るという意味ではとても幸せな現場だった。」と締めくくった。

『花子とアン』を愛する参加者が集まった会場は、制作者の楽しい話に、終始和やかな雰囲気に包まれていた。

■カンヌライオンズ入賞作品上映会

11月24日（月・振休）、浜離宮朝日ホールで「第61回カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル入賞作品上映会」を開催した。講師は、フィルム部門の日本代表審査員を務めた古川裕也氏にお願いした。古川氏は、同フェスティバルの審査の様子や世界の広告の最新事情を紹介しながら、グランプリ『The Epic Split（分割の叙事詩）』（ボルボトラック／スウェーデン）、『Sorry, I spent It on Myself(ごめん、自分のために使っちゃった)』（ハーベイ・ニコルズ／イギリス）の2作品をはじめ、入賞作品の中から選んだCM14本を上映。それぞれに詳しい解説を加えた。

この上映会のように、解説付きで世界の秀作テレビCMをまとめて見ることのできる機会はとても少ないことから、参加者は熱心に耳を傾けていた。また、どの作品によい印象を持ったかを参加者に問うなど、客席とのやりとりを交えた構成が好評を得た。参加者200名。

■トムス・エンタテインメント アニメと歩んだ50年展「昭和～平成 時代を飾ったアニメたち」

12月11日より、トムス・エンタテインメントのアニメ制作50周年を紹介する企画展を開催。オリジナルポスターや年表でトムスアニメの歴史を振り返る。さらに普段見る事の出来ないアニメ制作の裏側も、セル画や設定資料、絵コンテなどを織り交ぜ紹介。懐かしのアニメを楽しむ大人、放送中のアニメを楽しむ子供という構造は、そのまま幅広い年齢層の来場者として反映され、同社のアニメ制作の歴史を如実に物語ることとなった。併せて会場では、トムス制作のアニメから厳選15作品を上映。また会期中の4日間、グッズ物販コーナーを特設する。（2月15日迄）

■NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」全国巡回展

9月18日～24日、NHK横浜放送局主催による「軍師官兵衛」全国巡回展を開催。会場では資料や小道具、実際の撮影に使われた衣装が展示されるなど、ドラマの世界を分かりやすく紹介した空間が演出された。「放送が楽しみになった」「より一層ドラマに興味がわいた」等、時宜を得た展示を高く評価する感想が、多数寄せられた。

■ACC CMフェスティバル入賞作品上映会

12月14日（日）、情文ホールで「2014 54th ACC CMフェスティバル入賞作品上映会」を開催した。今回は、ラジオCM部門の審査員を務めた井村光明氏に講師をお願いした。まずテレビCM部門の上位に入賞した91作品を上映した後に井村氏が登壇。審査会の様子やラジオCMの最新事情を紹介しながら、グランプリ『ボクの周りのブラ事情』（ワコール）をはじめ、上位に入賞した15作品を鑑賞した。ラジオCMについて井村氏は、映像がないので費用がかからないといった作る側にとっての魅力と、耳からの情報だけがたよりなので想像力が養われるなど聴く側の楽しみ方を力説。最後に、前回のラジオCMグランプリ作品『まったく同じナレーション』（ワコール）を聞き、2年連続受賞の制作スタッフに賛辞を贈った。

参加者からは「ラジオCMもあるとは知らず、意外と面白かった」「ラジオCMを見直した」「授賞ラジオCMを聞いた客席の反応が興味深かった」といった感想が寄せられた。井村氏の話を聞き、ラジオCMにあらためて関心を持った参加者も少なくなかった。参加者178名、全日本シーエム放送連盟との共催。

■日韓中テレビ番組上映会

「日韓中テレビ制作者フォーラム in 横浜」の関連企画として、9月26日～10月13日の期間、同フォーラム参加作品13本の上映会を行った。日本、韓国、中国で制作されたドラマ、ドキュメンタリー、エンターテインメント番組をジャンルごとに構成し、日替わりプログラムとして上映。来場者からは、各国の最新テレビ番組を通じて「日韓中の友好や、相互理解に繋がった」という主旨の意見が寄せられた。

■2014秋の人気番組展

各放送局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催（10月17日～11月30日）。会場では新番組のポスターやドラマ台本に加え、関連グッズやスタジオセット模型なども展示された。「面白そうな新番組を見つけることができた」という感想と共に「春秋と、恒例の人気番組展を楽しみにしている」という声も多数あり、番組改編期に寄せられる関心の高さが伺えた。11月15日には、テレビ東京の人気キャラクター・ナナナとの記念撮影会を開催した。

■今後の公開セミナー予定

・テレビが記録した3.11から4年～東日本大震災・福島原発事故を忘れない!～公開セミナー（3/22〈日〉情文ホール）

■サテライト・ライブラリー及び大学での教育利用

■諫早市と市川市にサテライト・ライブラリーを設置

今年度のサテライト・ライブラリーの運用は、2箇所で実施が可能となった。ひとつは長崎県の諫早市立諫早図書館で、昨年11月29日から運用を開始している。

諫早市は脚本家・市川森一さんの故郷でもあり、名誉館長でもあった市立諫早図書館内での番組視聴の要望が、諫早市長から寄せられ、市川氏の作品「ドラマ　おいね～父の名はシーボルト～」NHK・2000年放送と地元諫早市を舞台にしたドラマ「親戚たち」フジテレビ・1985年放送・全13話の合計14本を視聴可能とした。

同館では、同市にゆかりのある方々を顕彰する事業に力を入れられており、館内に「文人コーナー」が新設された。その一角に専用のパソコン2台を設置し、視聴できるコーナーを整備した。視聴コーナーでの利用は、今回初めての試みである。利用者は、受付で利用者登録を済ませた後、希望の番組を視聴することができる。これまで約2か月間で、150人を超える多くの方々の利用があった。

もう一箇所は、千葉県市川市の文学ミュージアムで、昨年度に引き続き、市川市が顕彰する脚本家・水木洋子さんの作品「はまなすの花が咲くころ」（テレパック・1981年～1982年放送）の24話を、1月18日から3月11日のうち12日間、上映会形式で同ミュージアム内のベルホール（46人収容）において、番組を利用している。

いずれも番組は、横浜からIP伝送によるストリーミング形式で送信しており、利用にあたってはID／パスワードの入力が必須であるなど、強固なセキュリティ対策を講じたシステムで運用している。

■東京大学、長崎県立大学での公開番組の活用

大学での教育利用については、2校から番組活用の要望があった。ひとつは昨年度も実施した、長崎県立大学国際情報学部情報メディア学科「映像研究」（村上雅通教授・受講生60名）での講義での上映、ならびに講義前後の学生のLL教室のパソコンでの番組視聴で、3番組が活用された。

もう一箇所は、東京大学教養学部「マス・メディア論」（同大学院情報学環・丹羽美之准教授・受講生200名）の「テレビ番組で見る戦後日本」をテーマにした講義内での上映で、9番組の要望があった。

両校とも今年度後期の授業で活用しており、番組は講義テーマに沿ったドキュメンタリーやドラマ番組が中心であった。教授からは、「番組を使用した授業は、内容も充実し、学生の理解度も深い。」と、高い評価をいただいている。

■番組保存委員会ならびに事業運営委員会開催

【番組保存委員会】

昨年11月20日に開催された第2回番組保存委員会で、平成26年度の保存対象番組を決定した。テレビ番組は、平成24年度に放送された番組が選定対象であり、NHK、民放局135社の合計1,119本を選定した。ラジオ番組は、平成25、26年度に放送された番組が選定対象であり、NHK、民放局31社の157本を選定した。ラジオ番組は、今後授賞が確定する番組を含め、合計350本程度になる見込み。選定された番組は各社に提供の要請を開始した。

2月5日に開催された第3回の番組保存委員会では、保存番組複製基準の見直し、ならびにサテライト・ライブラリーおよび教育利用の本格運用に向けた基本協定書の見直しについて、審議され、引き続き次回委員会で審議することとなった。

【事業運営委員会】

昨年12月11日に開催された第2回事業運営委員会で、民放BSテレビ7社が、26年度に賛助員に加入いただくこと、法人賛助員拡充について、地元横浜の企業に賛助員加入をお願いしていくことなどについて報告した。

本年2月12日に開催された第3回事業運営委員会では、平成27年度事業計画案ならびに収支予算案が審議され、同案をもって第2回理事会に諮ることが承認された。また「財産管理運用規程」の一部改定案、基金運用の当面の方針について審議され、それぞれ原案をもって第2回理事会に諮ることが承認された。

■BL・クリエーター支援サービス利用状況

本サービスはIP伝送により、民放、NHKの局舎内で放送ライブラリーの公開番組の一部が視聴できるもので、若手制作者の研修などに活用していただくことを目的に運用している。

本サービスの運用開始から2月15日までの利用状況。

◇視聴可能番組数：テレビ番組2,745本、ラジオ番組744本
◇利用登録者数：465人（92社）、IPアドレス登録　131社
◇視聴回数：テレビ番組　825回、ラジオ番組　99回

利用方法に関するお問い合わせは、当センター業務課まで。